

米先住民が語る

ウラン採掘・精錬の被害実態

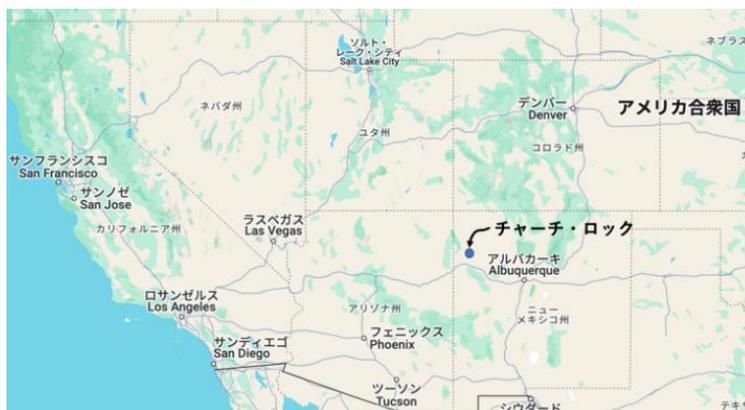
～来日したディネ（ナバホ）の女性たちとの交流報告～

核兵器も原子力発電も、核エネルギーの元になるウラン鉱石の採掘・精錬から始まります。ウラン採掘・精錬は、その多くが世界中の先住民の土地で、環境汚染や採掘・精錬労働による被害を先住民に押し付けながら行われてきました。

この8月、原水爆禁止日本国民会議が、米先住民ナバホ（自分たちの言葉では「ディネ」なので、できればそう呼んでほしいとのこと）の女性二人～エイディス・

フッドさんとテラシタ（テリー）・ケヤンナさん～を世界の核被害者＝ヒバクシャとの連帯のために、被爆79年原水禁世界大会・広島大会（8月4日～6日）に招聘しました。彼女たちは、6日には「核兵器廃絶をめざすヒロシマの会」（HANWA）の集いにも参加しました。8月8日～10日は「救援関西」がコーディネートし、振津が同伴して、福島原発事故被災地を訪問しました。福島では「福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会」の方々が受け入れをして下さり、葛尾村、檜葉町、浪江町・津島、そして大熊町・双葉町を回って、新地町でも視察・交流をさせて頂きました。特に、「帰還困難区域」を抱える浪江町・津島では、「ふるさとを返せ 津島原発訴訟」を闘っている原告の方々とも交流し、「国や企業が人々に放射能被害を強いているのに、責任を取らず、補償も『原状回復』もしようとしなない核被害の現状は同じだ」と、米先住民の二人と福島原発事故被害者の方々は、互いに共感し、今後の連帯を誓って「エール交換」をしました。

エイディスさんとテリーさんは、ニューメキシコ州のチャーチ・ロックの近くのレッド・ウォーター・ポンド・ロードという村から来られました（上地図）。この集落は、ノースイースト・チャ





一チロック鉱山 (NECRM) とクィヴェラ/カーマギー鉱山に挟まれ、ユナイテッド・ニュークリア社のチャーチロック精錬所 (1977-1982 年操業) の近くにあります。二つの鉱山は 1983 年に廃坑となりましたが、大量の鉱山廃棄物「ウラン残土」が残されました。また、チャーチロック精錬所では 1979 年に、放射性廃棄物貯留池ダムが決壊事故を起こし、コミュニティ周辺のみならず、放射能が流れ込んだプエルコ川流域の広範な地域が汚染されました。エイディスさんとテリーさんは「ウラン採掘によって汚染された土地や水を元に戻し、住民の健康を取り戻し、私たちが生活する場所の自然と文化の

環境を守り、存続させること」を目指して 2006 年に設立された、住民組織「レッド・ウォーター・ポンド・ロード・コミュニティー協会 (RWPRCA)」のリーダーです。

来日旅程の最後、8 月 11 日には「救援関西」主催で、関西 (西宮市大学交流センター) でも「講演・交流の集い」を持ちました。今回の交流の受け入れに賛同カンパを寄せてくださった皆さん、本当にありがとうございました。今年 3 月に他界された「救援関西」代表の長崎被爆者・山科和子さんは、1980 年代の早くから米先住民のウラン採掘被害者をはじめ世界の核被害者＝ヒバクシャとの連帯にも取り組んで来られました。私たちは山科さんの遺志も継いで、チェルノブイリ、フクシマ、そして世界のヒバクシャと繋がって、ヒバクシャの権利と補償の確立をめざし、これ以上の核被害を許さないための活動に、引き続き取り組んでゆきたいと思います。

「救援関西」事務局・振津かつみ

ウラン採掘・精錬による汚染被害～米先住民ディネの女性たちの報告

8 月 5 日原水禁広島大会分科会と、8 月 11 日「救援関西」主催の講演・交流会でのエイディスさんとテリーさんのお話を合わせて、以下にまとめました。「エイディスさんのお話し」の後半部分 (「住民自主健診」以降) は、実際には 11 日にテリーさんが交替して話した内容を記載しました。二人の話で内容が重なる部分は、エイディスさんのお話の方に入れ込みました。そのため、結果的に「テリーさんのお話し」が短くなっています。

二人が住んでいるナバホ・リザベーション (居住区) は、米南西部のニューメキシコ、アリゾナ、ユタ、コロラドの 4 州の州境が交わるフォー・コーナーズと呼ばれる地域に広がっています。ナバホ・ネーションのホームページによると、面積 69,000km² [北海道より少し狭いくらい]、人口 25 万人、米



先住民の中では最大人口の部族です。この地域にはウラン鉱脈があり、これまでの核開発によって残されたウラン廃坑・製錬所跡など 500 以上がこの地域に集中しています（2 頁の図）。元ウラン坑夫の多くは肺がん、肺線維症などの呼吸器疾患、腎障害など、ウランの粉塵やラドンガスへの曝露による病気で苦しみ、亡くなっている人々も多いのです。人々はウランの危険性を知らされず、坑夫のみならず、家族も汚染した住環境で被曝しました。レッド・ウォーター・ポンド・ロードは、そのような被害を受けた村のひとつであり、二つの鉱山と重大な放射性廃液漏えい事故を起こした製錬所に囲まれ、先住民への「核の民族差別、不正義、植民地主義」とも呼ばれる、ウラン開発被害の「象徴的」なコミュニティです。

「将来世代」のために「安全で汚染のない大地を取り戻そう」と奮闘している彼女たちの声に耳を傾け、ウラン採掘から始まる核利用の一つのエンド・ポイントとして、広島・長崎の原爆被害を経験し、そして今、福島原発重大事故による被害も経験している日本の私たちが、どのように連帯してゆけるか、皆さんと一緒に考え行動して行きたいと思います。（ふりつ）

〈エイディスさんのお話し〉

「核燃料サイクル」の始まり～ウラン鉱山・製錬所に囲まれた村から

こんにちは、友人の皆さん。

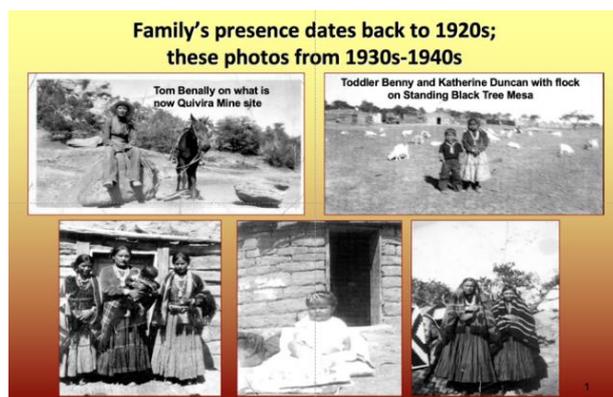
私は米国のニューメキシコ州のナバホ・ネーションにある、レッド・ウォーター・ポンド・ロードという村から来ました。その住民組織レッド・ウォーター・ポンド・ロード・コミュニティ・アソシエーション（RWPRCA）で活動をしています。私たちの村は都市から離れた山間にあり、羊や牛など家畜を飼って暮らしています。レッド・ウォーター・ポンド・ロードの北東にパイプ・ライン・ロードという集落があり、この二つ集落がウラン採掘の被害を受けています。鉱山会社がウラン採掘をやめて撤退した後になって、私たちは、40年にも渡って汚染の中で暮らしてきたことを知りました。村の南側にはノースイースト・チャーチロック鉱山があり、北側にはカーマギー鉱山があります。そして、道路を挟んで南東部にはウラン精錬工場もあります。そのような所に私たちは暮らしています。

来日した日の夜遅くに広島に着き、翌朝、広島原爆資料館に行きました。資料館でたくさんの写真を見て、「なんでこんなことが起こったのか？」と思いました。ちょっと考えてみてください。

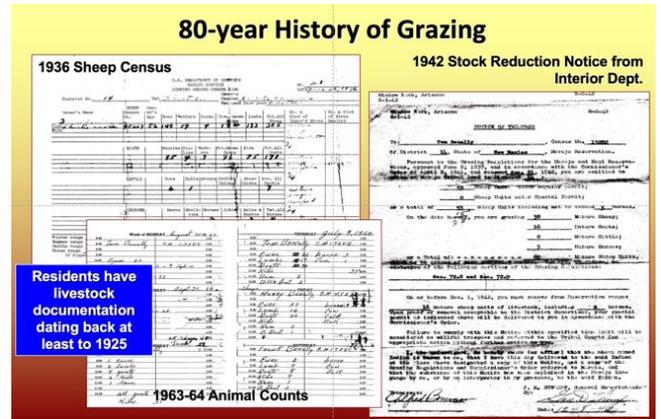
「核サイクル」が繋がっていることを考えなければなりません。ナバホの私たちが住んでいるところでウランが採掘され、それが「核サイクル」の始まりです。そして、最後には「破壊」で終わるのです。

100 年以上前から暮らしていた村の証～生業の羊を射殺されたトラウマ

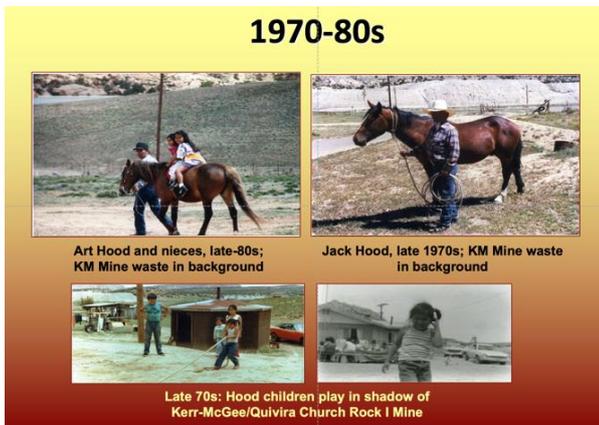
私の祖父がまだ生きていた頃の写真をお見せします。政府は私たちに対して、「あんたたちは元々ここに住んでいたのではなく、ウラン採掘が始まってから移住してきただけじゃないのか」との疑いをかけてきたので、ウラン採掘が始まる前の 1930-40 年代の写真を証拠として集めて示しました。



また、こちらは、私たちがいつ頃からここに住んでいたかを示す書類です。何の書類かという、これは羊の数を示しています。ナバホにとって、羊はとても重要です。食物でもありますし、毛を刈ったりいろいろやらなければならないことがあり、生業なんです。1930年代に、米国政府は、私たち先住民の暮らしとは関係なしに、飼育する家畜の数の制限をしました。そして決められた数を上回る場合は、その場で射殺したのです。当時のことを祖父母たちは、非常に鮮明に記憶していて、コミュニティのお年寄りの精神的トラウマとして残っています。自分たちの家畜が目の前で撃ち殺され、冬の間の食糧の蓄えを保障するものが数分で失われてしまったからです。このように 80 年前に家畜の数を記録した書類があるということは、少なくとも、80 年、100 年も前から私たちがこの場所に住んでいたことを示す証拠でもあります。



危険性も知らされずにウラン採掘が始められた



私たちナバホの歴史や言い伝えでは、「ウラン」なんてものは聞いたこともありません。ウランがいったい何なのか知りませんでした。放射線は見ることもできませんし、感じることもできません。ウラン採掘が、私たちの家の真ん前で始まりましたが、私たちはただ、「職場ができた」と思っただけで、その危険性も知りませんでした。そして、ウラン鉱山で採掘が 20 年間くらい行われていましたが、それでも、それが何なのか、その危険性も全く知りませんでした。

1970-80 年頃の村の写真で、子どもたちが馬に乗っている姿の向こうに丘のように見えるのは、実はウラン鉱山から掘り出された廃棄物である「ウラン残土」です。私たちは、危険性を全く知らされずに廃棄物の山に囲まれて生活をしていました。家から 1 マイル (約 1.6km) の所に、そのようなウラン残土の山があり、ウラン残土の周囲にはフェンスも、危険性を知らせる表示もありませんでしたから、家畜はもちろんのこと、子どもたちも残土の上で遊んでいました。フェンスがやっとできたのは 2012 年になってからです。

チャーチロック・ウラン精錬工場の鉱滓ダム決壊～米国史上最大の放射性廃液漏出事故

1979 年 7 月 16 日の早朝、ウラン精錬工場の鉱滓ダムが決壊しました。ユナイテッド・ヌークレア・マインという会社が所有していた製錬所です。14,000 万ガロン (5 億 3200 万リットル) の有毒な液体廃棄物が溜まっていた、「溜池の土手」がこの写真のように崩れて、9,400 万ガロン (3 億 5720 万リットル)、重量にして 1,100 トンの有毒な廃液が、コロラド川の支流のプエルト川に流れ込み、100 マイル (160km) 離れた下流まで汚染が広がるという、アメリカ史上最大の放射性廃液漏出事故でした。この廃液は、ウランとその壊変核種だけでなくウランを溶出させる工程で使われた酸が混ざった廃液だったので、当日の朝、汚染した川を徒歩で向こう岸に渡った人々の皮膚や家畜の皮膚は火傷のような傷害を受けました。1994 年の米国の地質調査では、この 1997 年の事故を上回

る量の放射能汚染が、20年間にわたるウラン採掘の鉱山排水で放出されたことが明らかになっているそうです。

同じ年の1979年には、米国でスリーマイル島原発事故がありました。3月28日に起こったスリーマイル島原発事故は、すぐに国内外で報道されましたが、ここの鉱滓ダム決壊事故は米国内でもほとんど報道もされませんでした。そして、何十年も経った今も放置され、除染も全くされませんでした。

Church Rock Uranium Mill Tailings Spill July 16, 1979*

(*remains the largest release of radioactive wastes, by volume, in US history)



市民による環境・健康調査が始まる～米連邦政府の環境保護省による調査の契機に

2002-3年頃、環境保護NGO「南西部調査情報センター」(SRIC)の調査プロジェクトであるチャーロック・ウラン・モニタリング・プログラム(CRUMP)と呼ばれた調査に、私たちコミュニティとしても参加することになりました。この写真は住民が、ウラン残土の側で空間放射線量を測定しているところです。このような市民による環境調査がきっかけとなって、2005年には連邦政府の環境保護省(USEPA)による環境調査が始まりました。

住民組織の設立～安全な環境で生活する基本的な権利を取り戻すため

2006年に私たちはRWPRCAという草の根の住民組織を結成して活動を始めました。この地域の被害を連邦政府やナバホ・ネーションのリーダーたちに訴え、安全な環境で生活するという、私たちの基本的な権利を取り戻すためです。彼らはこのようなことが起こっていることを、すぐには認めようとはしなかったのです。2015年になって、やっとナバホ・ネーションのリーダーたちも私たちの集会、「ウラン採掘はいらない」ということを広くアピールするための行事に出席してくれるようになりました。

住民による自主健診

一方、2003年ごろから、住民とSRICが相談しながら健診の準備も進めてきました。そして2007年にSRICとニューメキシコ大学の研究グループの調査団が村に来て、地域の人々と一緒に協力して住民健診をしました。写真のように、村民の民家を間借りして、受付、尿検査、血液検査など、健診を行いました。



RWPRCA は、ナバホの人々にウラン採掘に関連した健康影響があるかどうかを示すための、いくつかの健康調査に協力しています。一つはディネ・キドニー・スタディ（ディネはナバホのこと）、ナバホの人々の腎臓障害を調べる調査です。（ウランは重金属なので、腎毒性があります。）この

Urine-uranium concentrations (in ug-U/g-creatinine) in three cohorts

Study →	DINEH Kidney Study (2007)	NMDOH (2003-2008)	NHANES (2001-2002)
Participants →	22 residents* near U mines	NM statewide N=817	Nationwide N=2,689
Median	0.0441	0.026	0.007
3 rd Quartile	0.0818	0.058	.014
95 th percentile	0.3562	0.354	.040

*No current exposure to uranium in water sources

表（左）は、ディネ・キドニー・スタディとニューメキシコ州の健康局、全米の調査のデータで、尿中のウラン濃度の中央値を比較したものです。被害を受けたコミュニティでは（22人という少ない人数のデータではありますが）、より高い数値を示しています。

健康調査の結果、高血圧、自己免疫疾患などのリスクが、ウランによる影響で高くなっている

こともわかりました。危険性を知らされなかったので、鉱山からの汚染した機材や廃棄物を資材として家を建てた人もいました。汚染した土埃にまみれてしまっている家もありました。

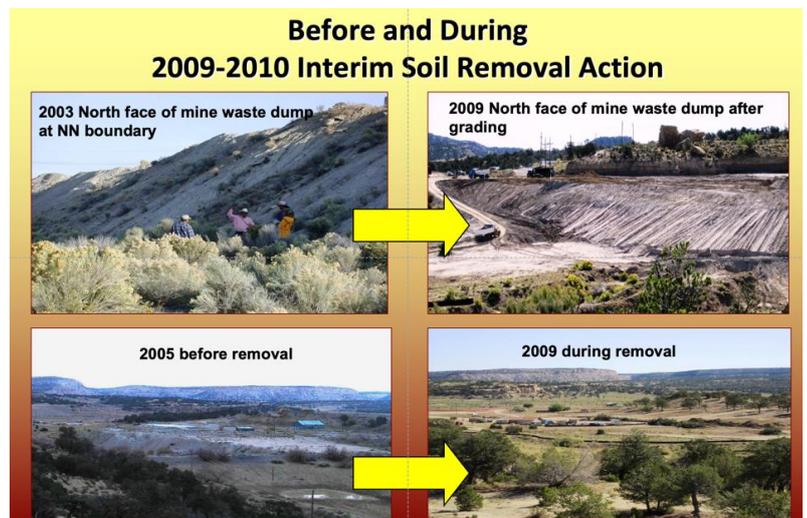
また、家畜を屠殺した時に、肉が黄色っぽく変色していることがあり、その肉や内臓を SRIC に送って調査してもらったところ、内臓に腫瘍があることがわかりました。また、家畜の生殖器系が影響を受け、毛のないヤギが生まれたこともありました。生まれたヤギは、外気に触れ、30分くらいしか生きることができなかったそうです。

連邦政府による「汚染対策」～一時避難と「除染」、しかし未だ不十分なまま

政府が何も対策をしてくれないので、2007年に私たちは首都ワシントンの公聴会で実情を訴えました。ナバホ・ネーションのそれぞれ違う地域から来た人々が、それぞれの居留区でウラン鉱山関連で何が起きているかを公聴会で話しました。公聴会で私は、「毎朝早く起きて、お祈りをしよう」と窓の外を見ると、すぐそこにウラン残土の山が見えます。反対側の窓からも、また別の鉱山から出たウラン残土が見えます。そこら中にあるのです。風や水の流れとともに、この廃棄物は拡散していくようです。私たちは毎日、そのようなウラン残土のチリを吸い込んで、廃棄物とともに暮らしています。」と、訴えました。

住民の自主調査や環境保護省（EPA）の調査で、コミュニティが汚染されていることが明らかになり、住民の住居の周辺から汚染を取り除くプロジェクトが始まりました。2007年には3ヶ月間、初めての「避難」が行われ、その間に汚染対策として、ウラン残土を移動させたり、土で覆ったりする作業が行われました。2回目は2009-10年、7ヶ月間、さらに2012年は5ヶ月の「避難」を強いられました。少し離れた街のモーテル（安宿）に家族ごと避難させられ、子どもも高齢者もそこで過ごさねばならなかったのです。

家の周囲の土を上から6インチ（約15cm）取り除き、汚染していない土に入れ替えました。土埃を抑えるために家の周囲に散水したりしました。それでも、まだやらなければならないことが、沢山



あります。これは除染の前後の写真ですが、この場所では、ナバホの所有地にはみ出していた汚染土を、ジェネラル・エレクトリック社（GE）が所有する敷地内に押し戻しただけです。こちらの写真は、長年放置されたウラン残土の上に木が茂っていたのを切り倒して平らにしたところです。ウラン残土の上に生えた木々は、根から放射能をたくさん吸収してしまっているのです。切り倒さなければなりません。それ以外にどうしようもないのです。景色も全く変わってしまいました。

「巨額の費用」は国と企業が負担して「環境回復」をするべきだが…

除染のためには4,430万ドルという巨額の資金が必要になります。「だからできない」と、政府や鉱山会社は言いますが、私たちは何十年にもわたって被害を受けてきたのですから、是非やるべきだと思います。鉱山会社を引き継いだGEは裁判でEPAを訴えた結果、全額支払わなくても済むようになり、GEが67%、EPAが33%を支払うことになったのです。それで、米国政府は基本的にこの計画を承認しました。政府が払うということは、結局は税金から支払われるわけで、私たち、被害を受けた人たち自身が支払うことになるのです。

私たちの村の北方2マイル（3.2km）の所にブラック・ツリー・メサという高台があります。そこは、私たちの祖先が暮らしていた所で、聖地でもあります。私たちは毎年、夏に家族親戚、皆でそこにピクニックに行きます。そこはウランの汚染のない場所なので、私たちはレッド・ウォータ・ポンド・ロードから、この場所に移住できるようにと政府に求めたのですが、政府からは「金がかかり過ぎるからダメだと」言って断られました。

二つの鉱山のウラン残土の「行き先」は…

2013年頃に新たな除染の計画をEPAが示しました。2027-37年にかけて、ノースイースト・チャーチロック鉱山の残土を、道路を挟んで南東にある精錬所跡の方に移動させるというのです。どちらもGEの敷地なので、そういう提案をしているのです。110万立方ヤード（約100万立法メートル）の汚染土を移動させるというのです。しかし、こちらの廃棄物をあっちに移動させるだけで、それでも私たちの村のすぐ近くですので、私たちはいいとは思っていないのですが、他に仕方ありません。EPAとGEはこの計画を進めたいというのですが、確約された時期はまだ示されていません。

一方、カーマギー鉱山の方は、ニューメキシコ州の40マイル（64km）離れたソルーに新しい処分場を作って、そこに持ってゆく計画がEPAから提案されています。しかし、廃棄物を移送させる間の安全性とか、いろんな問題が懸念されています。ウラン残土はウラン鉱石そのものではないので放射能汚染の度合いは低く、そのことを考慮しながら、計画を進めてほしいと私たちは思っているのですが、しかし、この提案は同じナバホの中で二つのコミュニティが対立するような計画です。この計画をめぐる、ナバホのコミュニティの中で「分断」が起こっています。ウラン問題に具体的に関わっていない、あまり事情がよくわからない人々は、この残土をウラン鉱石そのもののように思って反対しています。私たちのコミュニティは、この計画を支持する声明を出しました。

（振津のコメント：エイディスさんがお話しされたように、カーマギー鉱山の「ウラン残土移送計画」は、連邦政府の環境保護省が提案したもので、ナバホの人々の中での新たな「分断」を生み出しています。RWPRとSRICは、「住環境のすぐ側にある汚染物をできるだけ取り除いてほしい」という長年の強い思いがあり、これまで政府はまともな「除染」対策をしてこなかったし、コミュニティが希望している汚染のない高台ブラック・ツリー・メサへの移住は「資金がかかり過ぎる」と

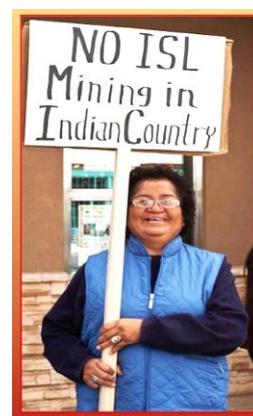
して受け入れようとしないうし、このような難しい現状の下で、今回提案された「ウラン残土移送計画」を支持する声明を出すに至ったのだと思います。しかし、「移送先」の「処分場」（元々一般廃棄物の処分場がある）の近くのソルーのコミュニティからは、当然のことながら猛反発を受けているようです。移送中の安全性についても十分な検討がされていません。移送や処分場の建設の費用なども不透明なままです。今後、どうなるかわかりませんが、ナバホのコミュニティどうしてよく話し合っ、政府により「分断」されることなく、できれば放射能が拡散されない方向での自分たちの「解決案」を、ナバホの皆で協力して政府の責任を問、突きつけていってほしい…と個人的には願っています。

また、この問題を聞いて、私たちも他人事ではないと思いました。福島でも、政府は全県で「除染」を行い、取り除いた汚染土を第一原発周辺の「中間貯蔵施設」に運び込み、「30年後には全て他県に持って行く」ことを決めましたが、受け入れ先は決まっています。一定レベル(8,000Bq/kg)以下の汚染土は「再利用」する方針で放射能をまた拡散させようとしています。

放射性廃棄物は、一度生み出してしまくと、その処理・処分は世代を超える深刻な「負の遺産」となります。私たちは、このような核廃棄物を生み出す核利用システムそのものを一日も早く止めなければなりません。)

新たなウラン探掘法(in-situ leaching: ISL)にも反対

この写真は私の妹ですが、彼女は ISL 鉱山に反対するプラカードを掲げています。(振津の補足: ISL は、地面にパイプを差し込んで炭酸などの化学物質の溶液を注入し、地層の中で、その場で[in-situ]ウランを溶かし出し[leaching]、別のパイプから吸い上げて「採掘」という「採掘法」です。化学物質と放射能で地下水が汚染される危険な抗法です。ノースイースト・チャーチロック鉱山でも、この ISL によるウラン採掘再開が 1988 年に鉱山会社によって提案され、住民が反対しました。) ISL は環境汚染だけでなく、大量の水を使うことも問題です。乾燥地帯である米南西部に暮らす私たちには、水はとても大切なものなのです。



ナバホ以外の多くの人々と交流しながら活動に取り組む～自身と大地の「癒し」を

私たちの活動を紹介した写真をいくつかお見せしましょう。私たちはモンゴルの人たちとの交流もあります。モンゴルにもウラン鉱山があつて同じような被害があるということで、(SRIC の紹介で) 2014 年から交流が始まりました。彼らも羊を飼って暮らしています。羊を屠殺して一緒に食事をしました。その翌年の 2015 年には日本から原水禁の視察・交流団が訪問しました。(振津コメント: そのような交流・訪問も、RWPRCA にとっては、自分たちが孤立していないということを再確認することができた「支援」のひとつとして受け止められているようです。)

こちらの写真は、女性たちが、自分たちで作ったキルト広げてアピールをしているところです。このような活動に、多くの人々がボランティアで協力しています。また、ディネ～ナバホではなくディネと私たちは呼ばれたのですが～ディネの伝統的な家であるホーガンを、コミュニティで集会などをする建物



として皆で一緒に建築しようとしています。しかし、除染が終わるまでは、そちらの作業に人手が取られてしまうので、ホーガンの建設もなかなか進まず、まだ完成していません。

次に、私たちの会で取り組もうとしている活動を列挙します。血液、尿の検査なども含めて、健康調査を継続し、コミュニティの人々に広げていきたい。肝臓、腎臓、呼吸器の病気など、また PTSD などの精神的問題、そして子や孫の感染症、次の世代への影響、さらに人間だけでなく家畜への影響、水、土、大気、植物への影響も調べたい。

また、チャーチロック・マインの汚染残土を移動させたい。道を挟んで反対側に移動させるというようなことは、してほしくないが、それを受け入れざるを得ないのではないかと考えています。ナバホ・ネーションの信託基金から 2,500 万ドルを費用に充てるというのですが、そんな資金がどこにあるのかはわかりません。提案されているように 2027-37 年まで待つのではなく、今すぐにも汚染物を移動させて欲しいです。

現在、村に残って暮らしているのは 2 家族で、人数は 15 人になってしまいました。鉱山が開かれる前は、家も 15 軒くらいあり 200 人以上が暮らしていました。汚染がわかったこともあって、徐々に人々は出て行ったのです。

私たち自身を被害から回復させるためには、「癒し」が必要です。そのためには土地を「癒さなければ」なりません。私は 2015 年に開催された水への権利についての南北アメリカの委員会でも発言しました。「私たちのコミュニティは国内の他のコミュニティよりも、ずっと後回しにされてきました。いつになったら私たちが安全に暮らせるようになるのでしょうか。あと何世代待たなければならないのですか。」と。何度もそのような発言をしてきました。

私たちは、米南西部の先住民と白人の住民グループや環境保護 NGO などのネットワークである「安全な環境を求めるマルチ連合」(MASE)に参加しています。また、ナバホ・ネーションの環境保護局などとも協力しながら活動をしています。10 月頃には、南アフリカで金と一緒にウランが採掘されるという場所からも人々の訪問予定があり、集会を企画しています。

他にも、2 年ごとに会議を開催し、いろんな行動を一緒にしたりしている、西部採掘行動ネットワーク (Western Mining Action Network) というのがあります。今年 10 月にもカナダのモントリオールで会議が開かれます。全米とカナダ、アラスカ、そしてメキシコからも来るかどうか知りませんが、とにかく北米の資源の採掘産業、石油・ガス、とか、ウラン鉱山に限らず、他のタイプの鉱石などの採掘も含めて、被害を受けているコミュニティが情報交換をして活動しています。

最後に、毎年 7 月 16 日に行っている「鉱滓ダム決壊事故を思い起こす日」の行事の写真をお見せします。毎年、違う色柄の T シャツを作ります。この行事を始めてからもう 20 年になり、今では、多くのマスコミの記者が取材に来ますし、テレビ局も来たりします。

ご清聴ありがとうございました。
アヒェへ(「アヒェへ」と言うのはナバホ語で「ありがとう」という意味。)

2009-2016: RWPRCA Sponsored Uranium Legacy Remembrance and Action Day



〈テリーさんのお話し〉

私たちのコミュニティの子どもたちへの健康リスクについて話したいと思います。私は自分の子どものことしか詳しくはわかりませんが、私の子どもたちは、鉱山会社がこれまで行ってきたことをずっと目にしながら、そして汚染した環境の中で生まれ育ってきました。私は、彼らが「健康リスク」を被ったと思っています。

何世代にもわたる女性(母系家族)の抵抗

私の高祖母のジェニーは、1800年代末に生まれました。彼女は、伝統の絨毯の熟練職人であり、農婦でもありました。彼女の時代に鉱山会社とナバホ・ナーションの間での「取引」が始まりました。曾祖母のベッシーは、1930年代に生まれました。彼女も絨毯の熟練職人で、メディスン・ウーマン(部族の儀式を執り行うなど、重要な資格と役割を持つ人物)でもありました。彼女は強くて気丈な人で、500頭もの羊を飼っていました。1950年代に、ナバホ・ナーションの部族の共有地で鉱山会社がウランの探査を始めた時には、調査用の杭を引き抜いて、外から「よそのもの」が侵入してくるのを防ごうとしたのです。しかし、その土地に、後にユナイテッド・ヌークレア社のノースイースト・チャーチロック鉱山が開かれてしまいました(村の南側)。

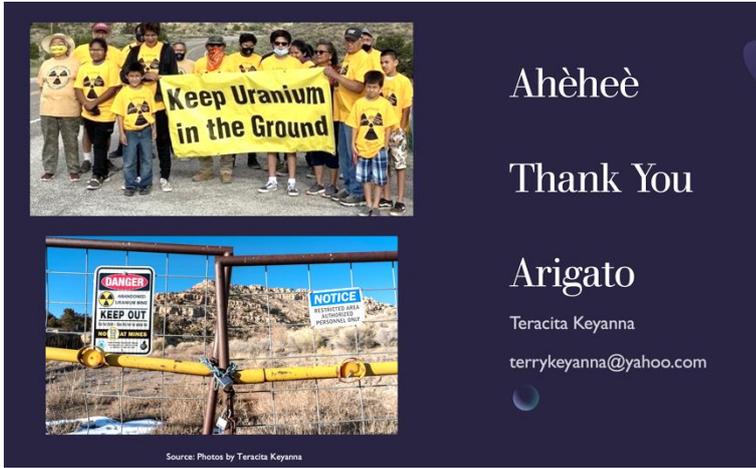
1960年代末から1970年代の初めにかけて、私の祖母のレベッカは、ニューメキシコ州のコヨーテ・キャニオンのチャプター・ハウス(集会場)で、ウラン採掘に反対して発言をしましたが、無視されてしまいました。そしてナバホ・ナーションは、カーマギー社に土地をリースし、そこにもう一つの鉱山が開かれました(村の北側)。また、1974年には、ユナイテッド・ヌークレア社のウラン製錬所と鉱滓ダムの建設が始まり、1977年から1982年の間、操業されました(村の南東)。二つの地下鉱山は1983年に閉山されました。レベッカは、現在生存している最後のダンカン家の女家長で、今はレッド・ウォータ・ポンド・ロードを離れて、世話をしてくれる娘と孫の職場や病院に近いギャロップの街の側に住んでいます。

ダンカン家の子孫たち

レッド・ウォータ・ポンド・ロードの「被ばく」生存者の三世代目は、私と夫の世代です。夫のキー・ケヤンナ・ジュニアは「ベネット・フリーズ」(注:ナバホとホピの土地紛争の対応のために、1966年に連邦政府が両部族の共有地におけるナバホによる一切の「開発」を禁止した政策。共有地に暮らすナバホの人々の住環境の改善も全て禁止されたために多くのナバホの人々が移住を強いられ、残って暮らす人々は劣悪な住環境に取り残されている。2009年になってやっと解禁となった。)による移住者の子孫で、また移住を強いられました。私、テラシッタはレッド・ウォータ・ポンド・ロードで生まれ育ちましたが、2018年に、子どもたちの健康への不安から村を離れて、近隣の街ギャロップに家族で移住しました。でも、故郷にやはり帰りたい。そのためには今すぐにも汚染物を取り除いて欲しいと願っています。

「健康リスク」を被った子どもたち…でも、たくましく成長している

私の長女、カラは双極性障害があります。長男のクラヴィンは生まれつき心雑音があり、心室(あるいは心房)中隔欠損と注意欠損多動性傷害(ADHD)があります。一番下のカシュリーンは、皮膚に複数箇所の皮疹ができ、4回、外科的に切除してガンの検査も行いました。幸い、いずれもガンではありませんでした。彼女は失読症(読書障害)があります。ナバホの出産コホート調査では、



Ahèheè
Thank You

Arigato
Tericita Keyanna
terrykeyanna@yahoo.com

母親のウラン廃棄物への暴露と子どもたちの先天障がいとの関係が示唆されています。私の子どもたちは、汚染した環境の中で生まれ育ってきたので、私は彼らが「健康リスク」を被ったと思っています。

健康の問題を抱えていても、私の子どもたちはたくましく成長しています。下の子どもたち二人は、レッド・ウォーター・ポンド・ロードの「お爺ちゃんのための木」という団体と一緒に、コ

ミュニティのボランティア活動に参加しています。冬の間の薪ストーブに使う薪を、お年寄りのために集めてあげるボランティアです。クラヴィンの健康は改善し、今は心臓も問題なくなって、ギター演奏や作曲をしたりしていて、このような音楽活動が ADHD の症状にも効果があるようです。彼は今、高校生です。核規制委員会の委員の前で、自分がいかに故郷のコミュニティの家を恋しく思っているかを語りました。

末娘のカシュリーンは2年生で、子どもらしく毎日過ごしています。お手伝いもしてくれる小さな女の子です。彼女は、手術の痛みにも耐え、自分で達成したいと思うことに一生懸命取り組んでいます。一人暮らしのお年寄りとお話するのが好きで、お年寄りも彼女がきてくれるのをとても喜んで感謝しています。学校では失読症のための課外支援も受けています。

コミュニティの将来のために自ら行動する

私は、コミュニティの将来のために、自分たちで行動を起こして、以下の取り組みをしたいと考えています。コミュニティの健康調査/ガンスクリーニング/腎臓健診/呼吸機能のモニター/精神健康のスクリーニング/スピリチュアルな健康：コミュニティの中でのバランスを取り戻す/ウラン除染の様々な政府による制度、多くの政策や手続きを促す/政策を策定する人々や、一般の人々への教育を続ける/自分たちのコミュニティや他のコミュニティの除染のために闘い続けられるように若い人々にも知らせ続ける。

「将来の世代」から借りている土地

私たちは、「将来の世代」から土地を借りているだけなのです。将来世代が、悲しみではなく、感謝の気持ちで私たちのことを思いだしてくれるようにするには、技術で達成できる奇跡をも超えるようなことをしなければなりません。世界が創造された時のままの姿で、将来世代に残さなければならないのです。私たちがこれまで経験してきたような、放射能にまみれた汚染した状態ではなく。

ご清聴ありがとうございました。
アヒェヘ

Initiatives for The Community's Future

- Establish Health Studies for the Community
 - Cancer Screenings
 - Kidney health monitoring
 - Liver function monitoring
 - Respiratory system monitoring
 - Mental Health Screening
 - Spiritual Health, bring balance back to the community
- Continue to navigate the many policies and procedures of different Government Systems of Uranium clean-up
- Continue the education of Policy makers and the public
- Continue youth outreach to ensure fight to clean up our community and other community's as well

質疑・応答、討論より

○ウラン採掘労働者の健康と補償はどうなっているのですか？

エイディス：

ウラン鉱夫の多くはガンに罹患しました。坑夫の多くは、タバコも吸っていたので、鉱山での被曝と同時に喫煙によるタバコの悪影響の両方を受けています。そして、もう、多くの人々が亡くなりました。

私自身も家族を養うために、鉱山で働きました。地下鉱山には二つの階層があって、私は地下一階、1,800 フィート (540m) の地下で働きました。地下二階は 2,000 フィート (600m) の地下です。籠のようなエレベーターに乗って地下に降りるのです。私の作業は、堅穴の中央から四方八方に伸びるトンネルの先端へ坑夫が掘り進めて、貨車に山のように積んで集めてくる鉱石の中に「放射線測定棒」を差し込んで、放射線のレベル（ウラン含有量が多いかどうか）をチェックする仕事でした。決められたレベル以上の場合は、引き続き、その方向のトンネルでの採掘作業が進められるのです。

私はそこで6年間(1976-82年)、解雇されるまで働きました。6年という短い期間ではありましたが、ウラン鉱山で働いた後、2006年になって悪性リンパ腫というリンパ球のガンに罹患しました。そして昨年(2023年)は、乳ガンにもなりました。

米国では、ウラン鉱山で働いた後に、幾つかのガンになった人々のうち（一定の基準を満たしていれば）補償金を連邦政府が支払うという「放射線被曝補償法」(RECA)というのがあります。この法律は、1971年までにウラン鉱山で働いていた労働者を対象としたものです。ですから私のように1971年よりも後に働いた人々は、政府から何も受け取ることができないのです。ちょうど現時点で、この法律は期限切れになってしまっているのですが、法律を「復活」させようという懸命な努力がされているところです。

(振津コメント: RECA は米国政府・エネルギー省が単独でウランを買い上げていた時期、つまり、すべてのウランが核兵器製造に用いられていたとみなされる時期に働いていたウラン坑夫については補償する[肺ガンなどのいくつかの疾病に罹患した人に、約700万円~1400万円の一時補償金を支払う]という法律です。政府としては、アメリカの「安全保障に貢献した」人々について政府が補償するという考えだと思います。RECAも、ネバダ核実験場の労働者・風下住民、ウラン坑夫などの被害者が、長年にわたって要求して1990年に実現したものです。2022年に補償申請の期限が延長されましたが、2024年6月にまた期限切れを迎えるということで、先住民の元ウラン採掘労働者をはじめ、被害者の粘り強い運動で、昨年、さらにRECAの2042年までの延長と補償対象範囲及び疾患を拡大する(1971年以降のウラン採掘労働者、トリニティ・サイトの風下住民、マーシャル核実験場風下のグアム島住民への補償、また、新たに腎臓疾患を含む)「RECA延長・拡大法案」が、上院で可決されました。一方、下院では「費用がかかり過ぎる」として採決しないまま、今年の6月にRECAは期限切れを迎えました。しかし、先住民をはじめ被害者は「自分たちが死んでしまう前」に「RECA延長・拡大法案」を下院で採択・成立させるように求め、今[9月26日現在]、30名以上のバスツアーを組織して首都のワシントンまで行き、下院議長に要請し、世論にも訴える様々な行動をおこなっている最中です。その行動への賛同の呼びかけがあり「救援関西」としてもオンライン・カンパをして支援しています。)

1971年までという枠を1991年までに延長させるという法案が提案されていて、何度もそのことを法律として成立させようとする努力がなされてきました。しかし、民主党も共和党も、それをダメにしてきました。もし、「RECAの延長・拡大法案」が通れば、健康問題を抱えている多くの人々が助かると思います。病院の費用、治療費で長年困っている人たちもいます。（振津コメント：連邦政府に「先住民」として認定されているナバホは、基本的な治療に関する医療費は公費で保障されています。）本人だけの問題ではなく、家族の問題でもあります。というのは、坑夫は汚染した服のまま家に帰り、家族も被曝しているからです。（振津コメント：エイディスさんも、実はRECAの申請をしたが、71年以降に働いたということで却下されました。）

1971年以降の労働者については、個々の会社が補償するというのではなく、別の法律（エネルギー関連従事者疾病補償法 EEOICPA）で連邦政府が補償を支払うことにはなっています。（振津コメント：しかし、実際には元坑夫が、様々な書類を揃えて申請するのは難しい現実があります。）

○採掘したウランは何に使われたのですか。

エイディス：ウラン坑夫たちの会話の中で、掘り出したウランは「冷戦」のための核兵器製造に使われるのだという内容のことを聞きました。当時は、「原発の燃料に使う」とは言われていませんでした。

○ウラン鉱山で働いていたのは、ほとんど先住民だったのですか。

エイディス：ほとんどは白人で、「よそから来た人たち」でした。先住民はさほど多くはありませんでした。私が働いていた頃は、20%くらいだったと思います。ただ、全米でウラン鉱山の廃坑が残されている地域のほとんどは先住民の土地です。

○坑夫には放射線被曝に対する防護は、なされていたのですか。

エイディス：放射線防護のためというより、地下の作業だったので、地下水が滴ってきて濡れるからということで、プラスチックのコートを着ていました。防護としては、ラドンガスがあるのでマスクをするようにとは言われていましたが、そのマスクで本当に大丈夫だったのかどうかはわかりません。

○医師会などは住民に協力してくれないのですか。一般の人々の放射線への理解や、マスコミの取り上げはどうですか。

エイディス：政府は、先住民に対しては公的健康サービスを行なってはいますが、あまり協力はしてくれません。ニューメキシコ大学病院は、健診に協力してくれていて、健康について理解するのを助けてくれています。一般病院はあまり助けてくれません。

ジャーナリストやマスコミについては、なかなか難しい。というのは、時には真実を伝えてくれていいのですが、時には捻じ曲げて伝えて、かえって敵から攻撃されることもあります。

一般の人々は、あまり理解していないし、考えてくれません。ギャロップには、ウラン産業をむしろ誘致するべきという人々もいます。金儲けのためです。

○先住民のスピリチュアルな考え方が、今、重要なのではないかと思うのですが、もう少しお聞きしたい。

テリー：ナバホにとって、スピリチュアリティ（精神性）は重要です。平和に暮らすために、水、空気、環境の全て、自然の中のすべてのものについてバランスを保つということが重要です。これが私たちの伝統的な考えです。例えばハーブを採取した時、取りっぱなしではなく、大地にまた何かを捧げることをします。私たちのナバホ語では、このようにバランスを保つプロセスのことを「ホジョ」と言います。大地と私たちが一体化する、身体的に繋がっているだけではなく、全身全霊が結びついているという考えです。すべてのスピリット（全霊）がバランスを保っているのです。私たちの大地に対する身体的な結びつきの証として、私たちは臍の緒を家の近くに埋めます。

○日本の人形峠のウラン残土の行き先も米先住民の土地だった

二人から補足発言：日本はかつてウラン採掘をしていた人形峠のウラン残土を、「燃料」としてアメリカに「輸出」しました。持って行った先は、ユート・マウンテン・ユートという先住民の居留区にあるホワイト・メサ核廃棄物処分場だったということも、日本の皆さんはぜひ知っておいてほしい。

（振津コメント：このように、世界的に先住民に核の被害が押し付けられており、核の正義、環境正義、核の人種差別、核の植民地主義、等[Nuclear justice, environmental justice, nuclear racism, nuclear colonialism]という言葉で問題にされています。核被害は、社会的に抑圧、差別、搾取されている人々に押し付けられてきました。また、核利用というのはそのような構造がないと成り立たないシステムです。このことは、福島原発事故被害にも共通した問題だと思います。福島原発で発電された電気は、福島の人々が使うためではなく、東京などの大都会を含む関東地域に送られていました。しかし、重大事故による放射能汚染は福島の地元にも最も深刻な被害として押し付けられています。）

最後に、日本に来ての感想～共に闘う人々がいることに感謝

エイディス：

今回、日本に招待されて、いくつかの場所を訪問して、私にとっては「目を開かされる」ようなことでした。以前に、日本で起こったことについて知っていたこと、広島・長崎についてさえ、ただ、学校の教科書から学んだことだけでした。そこで起こったことについて、詳細には書かれていませんでした。広島資料館に行って、たくさんの展示物や映像を自分で見て、解説を読んで、その全体について考えさせられました。

広島にも行きました。私たち自身の目で見て、あそこで起こっていることは…場所はとても美しく、緑も豊かです。でも、線量計で測るととても高い数値を示していると聞かされ、こんなに美しい場所に、そんなに「邪悪なもの」が入ってしまったとは…。

どこでも歓迎をしてくださって、たくさんのご馳走を頂いて感謝しています…でもハンバーガーが懐かしいな。



広島・平和公園で慰霊碑前で
原水禁のゲストとして献花

テリー：

私は日本に来て、皆さんが歓迎してくださって、私たちのコミュニティは、もう孤立していないのだということを感じました。私たちの闘いは、自分たちの一つのコミュニティのためのものでなく、いまや国際的な闘いなのだと感じました。日本に、共に闘う人々がいることに感謝します。そして、直接に対面で知り合えたこと。そのことで、気持ちを新たにまた頑張ろうという思いになりました。

資料館を見学し、原爆が投下された場所を見て、そして原発事故の被害を受けた場所を訪問し、人々が経験したことを見て知ることは衝撃でした。人々がちゃんとケアされていない状況を見て、私たちがナバホ・ネーションで直面しているのと同じような状況が、ここでも起こっていると感じ、胸が張り裂けそうでした。

ほんとに歓迎してくださったことを感謝しています。

私たちの世代の間に問題を修復して、私たちの孫やひ孫が心配しなくて済むようにしたいと思っています。



榎葉町・佐藤龍彦さん宅で、ご家族、ご近所の皆さんも一緒に交流



浪江町・津島での交流



新地町での交流・記念にTシャツを贈る

8/11 西宮市大学交流センター

米先住民ナバホの人々が語る ウラン採掘・精錬の被害実態

原水禁の招聘でアメリカから来られたエイディスさんとテリーさんに「日本はいかがですか？」と尋ねると、「湿気がすごくて…」とテリーさん。そりゃあ、日本のムシ暑さはこたえるでしょう。真夏日の連続に、特に年配のエイディスさんは相当お疲れの様子です。お二人は、広島(被爆 79 年原水禁世界大会)で講演、福島で被災地の見学と現地の方々との交流、そして帰国前日なのに、西宮で締めめの講演会と、休む間もなく移動して日本の皆さんにアメリカで行われているウラン採掘・精錬による被害について話して下さいました。

西宮での開催決定が遅かったのでお知らせが行き渡らず、お盆でもあり、参加者が少ないのではと心配していましたが、思いのほか多くの方々に来てくださり、ホッとしました。また、「集会を企画してくれてありがとう。アメリカの先住民のお話を聞く機会なんてめったにないですから」や、「ウラン採掘のことはほとんど知らないから来ました」との、企画を喜ぶ言葉をいただきました。

まず、振津さんから、「1980年代にウラン採掘の状況を本で知り、1990年に反原発団体の仲間とアメリカに行き先住民の方に直に会って話を聞いた、以来、何度か先住民の居住地を訪れ、現地との交流を続けてきた」という経緯が話されました。アメリカ先住民の最大民族ナバホの人々は、人口25万人で、ニューメキシコ、アリゾナ、ユタ、コロラドの4州に跨るナバホ・ネーションに居住しており、お二人が住んでいるのはチャーチ・ロック(ニューメキシコ州)の近くの小さなコミュニティだということです。

講演の内容は他会場と重複するので、振津さんの報告(1頁～)をお読みください。お二人の話で印象に残ったことを、書き出してみます。

エイディスさんは、「広島原爆資料館に行き、『なんでこんなことが起きたのか』と思った。そして、ウラン



8月11日 救援関西主催・交流会
(西宮市大学交流センターにて)

採掘の仕事に従事していた私は、核サイクルの一番最初がナバホの地から始まっていたことに衝撃を受けた。当時は、ウランが何なのか、何に使われるのかを知らなかった。ウラン鉱山を単なる職場と考えていたから「放射能は味も匂いもない。ウランの危険性が知らされないまま20年間採掘され、精錬工場が操業された」「閉鎖後、他所から来た環境団体の調査によってウラン残土の危険性がわかった。自分たちが被害を受けていることを知るのに30年もかかった」と話されました。

また、福島を訪れて、「緑が豊かでとても美しいところ。でも、線量計の数値が高く、驚いた」「歓待していただき、たくさんご馳走になった」(ナバホの掟で海の物は食べないと

のこと。福島の方たちは自慢のお魚を出せなくて残念だったろうな～)

テリーさんは、「ナバホの教えは『大地を大切にしなければならない』『地球は自分が親からもらったものではなく、子ども達から借りているのだ』というもので、自然を汚染することは許されない」「水の権利は人権問題。健康に影響を及ぼす水の汚染はあってはならない」「3人の子ども達には、それぞれ放射線の影響が疑われる障壁がある。しかし、音楽に親しんだり、薪集めのボランティアに参加したりしてコミュニティ内で活動し、健康が改善されバランスを取り戻すようになってきた」「ナバホは『いただいたら戻す』という自然とのバランスを大切にする」

「広島や福島でも人々が望むケアが受けられていない。子孫が安心して生活できるように願う」「日本で、私たちは孤立していないと感ずることができた。被ばくは一地域の問題ではなく国際的な問題で、連帯していきたい」など、ナバホ文化についてと今回の来日の意義を強調されました。

丹波在住の文化人類学の研究者玉山ともよさん(現地で調査研究・振津さんとも同行)が来てくださり、「ウラン採掘については日本の企業住友金属が深く関わっていて、決して他人事ではない」「2つの鉱山に挟まれたナバホ居住地の除染は、不手際が続き上手く行われていない。日本の先駆例として見て、市民間の連帯で運動を進めていくことが大事」「日本にもウラン鉱山の残土がそのままの場所がある」「放射性廃棄物を日本から海外に持ち出し最終処分を画策している。許しがたい」などの発言がありました。

この日は、帰国準備もあるし、なによりお疲れなので、講演の後の親睦会はせず、お昼ご飯をいっしょにいただいただけですが、お二人の醸すゆったりした雰囲気から自然に溶け込んだ生活が感じられました。でも、福島でのご馳走に対して、冗談で「ハンバーガーが懐かしい」と言われるような茶目っ気を持ち主でもあります。お帰りになってから、日本のことをどのように周りの方々に話しておられるのかしらん、知りたいものです。
(たなか)

2024年6月21日・10団体呼びかけ政府交渉の報告 福島原発事故被害者への医療費減免措置継続と健康手帳の交付を政府に迫りました

脱原発福島県民会議、福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会、原水爆禁止日本国民会議、原子力資料情報室及び「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」を含む10団体の呼びかけで、2024年6月21日、政府交渉を持ちました。福島原発事故被害者を中心に、長崎、関東、関西などから約30名が参加し、「医療費等の減免措置」見直しの政府方針撤回と措置継続および国の責任による全ての福島原発事故被害者への「健康手帳」（医療費無料化等）交付を政府に迫りました。

全国署名1万9,786筆を第二次提出(累計3万2,594筆)、医療費等減免措置の継続を強く求める

交渉の冒頭、「医療・介護保険等の保険料、医療費の窓口負担、減免措置の見直し方針撤回と、措置の継続、国の責任で全ての福島原発事故被害者に健康手帳（医療無料化）を求める」全国署名1万9,786筆（累計3万2,594筆）を、厚生労働省・復興庁・環境省に第二次提出しました。「減免措置」削減が強行されて2年目に入中、「来年度概算要求が出される前に、是非とも改めて反対の声を届けたい」と、今回、新たな集約分を提出しました。

署名提出にあたり、「福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会」代表の紺野則夫さんは、事故から13年経っても避難生活は続いており、避難指示が解除されても、住民、特に子どもたちは戻れないという厳しい現状を訴えられました。帰還住民の多くが高齢者に留まる浪江町の実際の姿に言及し、全国署名に込められた熱い思いを背景に、「医療費等、減免措置」の継続は不可欠、国の責任で「健康と暮らしを守ってほしい」と改めて強く求めました。



厚労省・環境省・復興庁は、「国策による(原発事故)被害者」に「最後の最後まで国が前面に立ち責任持って対応」という基本方針を遵守し、医療費等減免措置を継続せよ！

交渉にあたって、私たちは「原子力政策は、資源の乏しい我が国が国策として進めてきたものであり、今回の原子力事故による被災者の皆さんは、いわば国策による被害者です。復興までの道のりが仮に長いものであったとしても、最後の最後まで、国が前面に立ち責任を持って対応してまいります。」「今後、原子力事故による被災者の皆さんが直面するであろう『すべての』課題に対しても、国として正面から取り組んでいくことは言うまでもありません。」(2011年5月17日、原子力災害対策本部の「取組方針」という、原発事故被害に向き合う「基本原則」を改めて示し、それを大前提に公開質問への回答を求めました。

しかし、政府回答は、原発事故によって生涯にわたる放射線被ばくの健康リスクを負わされ、未だ生活再建途上にある、被害者の実情を無視し、被害者の声を聞こうともしない、許し難いものでした。厚労省・保健局（国民健康保険課）は、これまでの交渉回答と同じく、「医療費等、減免措置」見直し方針の経緯と説明を繰り返し、方針撤回の考えはないと表明しました。そして、2023年の「減免措置」削減開始後には、対象地域の実情を見聞きすることは一切行っていないとの返答でした。

参加者が「放射能は広範囲に拡散され、避難指示区域で止まったわけではない。公平性と言うなら、指示区域外からの避難者にも同じような支援がされるべきだったのでは。」と詰め寄ると、「減免措置は、放射能被害に対するものではなく、避難に伴う経済的負担に対する支援」であり、「あくまで避難指示区域からの避難者が対象だ」と厚労省は開き直りました。参加者はさらに憤り、「今後、病状が改善することのない高齢者は不安を訴えている。」「避難解除になったら『国策による被害者』ではなくなるのか！」等々、追及すると、厚労省・保健局担当者は、まともに返答できず、被ばくに対する施策は「環境省で検討されるもの」、自分たちは「関係ない」と逃げるだけでした。

**低線量被ばくでも「健康手帳」を交付し、医療保障などの援護を行なう「被爆者援護法」に準じた
「新たな法整備」を福島原発事故被害者に！**

厚生労働省原子爆弾被爆者援護対策室は、これまで「所管ではない」として交渉には出できませんでした。今回は原爆被爆者援護策に関する具体的質問を出して担当者の出席・回答を求めました。そして、「被爆者健康手帳」交付にあたって、①被曝線量の個別確認は行っていない、②広島²の爆心地から3.5km(推定外部被曝線量1mSv相当)以遠の区域でも交付されている、③「黒い雨」被爆者は広島高裁の判決を受け、原告84名と同じように、広島²の原爆投下後に「黒い雨」に遭ったこと、11種類の疾病(注:「健康管理手当」支給要件の疾患)の罹患を要件として交付している(注:高裁の判決では疾病要件はなく、政府の施策はそれより後退している。)との回答を得ました。また、被爆者援護法に基づく現行の援護策～公費で年4回の健診、医療費は基本的に公費負担(一部例外あり)、介護保険サービスを受ける際の自己負担を公費で一部負担、健康相談、葬祭料支給、さらに疾病と被ばくとの因果関係が認められた場合は毎月15万円程度の手当ての支給、等～について説明も受けました。「被爆者援護法に準じた新たな法整備」を求めている福島原発事故被害者の前で、原爆被爆者援護対策室の担当者から施策の具体的説明を受けたことは、「福島原発事故被害者にも同じような施策を受ける権利がある」こと、「国は同様の施策を福島事故被害者に行う責任がある」ことを被害者自身が改めて確認する機会ともなりました。

「被爆者援護策の経験を活かし、『原爆被爆者援護法』に準じた、福島原発事故被害者のための『新たな法整備』を行うように。」との私たちの要請に対して、厚生労働省原子爆弾被爆者援護対策室からは、「所管ではないのでコメントする立場にない」、しかし「主管省庁の環境省の方からの要請があれば、対応していきたい」と、協力姿勢を示す返答がありました。原爆被爆者の闘いに学び、さらに運動を強め上げ、政府の厚い壁を突き崩して行きましょう。

**低線量被曝の健康リスクをより明らかにした国際核施設労働者調査(INWORKS)新報告を無視し
「統一的基礎資料」改訂作業に反映しようとしないう 環境省の責任逃れを許すな！**

環境省、復興庁、厚労省など政府はこれまで一貫して、福島原発事故被害者の低線量被ばくによる健康影響は単なる「不安」であり、健康被害は起こらないかのように宣伝してきました。その根拠としているのが「放射線による健康影響等に関する統一的な基礎資料」(「統一的基礎資料」)です。福島及び全国での研修など、リスクコミュニケーションで参照すべき資料に推奨され、活用されています。事実上、これは政府の統一見解の筈です。

ところが、2023年8月に発行された国際核施設労働者調査(INWORKS)では、30万人以上の被ばく労働者(平均蓄積被ばく線量約20mSv)の70年以上にわたる調査で、蓄積被ばく線量100mSv以下、さらには50mSv以下の低線量・低線量率被ばくでも「線量に応じてガン死のリスクが統計的に有意に増加する直線関係で概括でき」、そして「ガン死リスクの線量当たりの増加率は低線量・低線量被ばくでも、高線量・高線量率被ばくと同程度」であること、つまり、低線量・低線量率でも「閾値なし直線」(LNT)関係が当てはまることが証明されました。

環境省は、この新たな科学的報告を検討して「統一的基礎資料」の改訂に反映すべきです。しかし、2024年3月31日付け改訂版「統一的基礎資料」では、INWORKSの2023年8月論文やそれ以前の発表論文は一つも参考文献にはなくINWORKSの報告内容を反映した記載も一切なく、依然として100ミリシーベルト未満の健康リスクを認めず、「低線量率では高線量率よりもリスクが低くなる」などとも記載されています。私たちは、「統一的基礎資料」作成・改訂の検討委員会の議事録公開を含めた改訂作業の公開、検討委員会メンバーの公表、「統一的基礎資料」発行責任の所在を質し、また、今回の改訂作業で、INWORKSがどのように扱われ、議論されたのかされなかったのか、されたのであれば評価はどうだったのか等を、具体的に問い質し、環境省にもINWORKSの検討を迫りました。

環境省の回答はとんでもないものでした。①『**統一的基礎資料**』は政府統一見解ではない、②「**検討委員会**」の事務局も含めて改訂作業を請負業者に丸投げしている、③環境省は**成果物**(改訂された『**統一的基礎資料**』)を受け取るだけだが、「**発行主体としての責任**」はあるという、無責任極まりない回答でした。

しかし、交渉で環境省は、市民側のさらなる追及を受け、「**統一的基礎資料**」の内容の「**最終的な責任は環境省が持つ**」と、返答をせざるを得ませんでした。今回明らかになった「**統一的基礎資料**」に関する①～③の内容を広く知らせ、「**統一的基礎資料**」で低線量被ばくの危険性を否定してきた政府の責任を徹底的に追及しなければなりません。そして、INWORKSで明らかになった知見を、福島原発事故被害者の健康保障にも繋いで行きましょう。

原発事故被害者とともに、全国の反原発運動とも繋がって、運動をさらに強め広げよう！

「医療費等、減免措置」の見直し方針は、与党方針を受けた2021年の閣議決定「第二期復興創成期間以降における東日本大震災からの復興の基本方針」に基づく施策として強行されています。これは、福島のような重大事故が起きててもその被害は「大したことはない」、「10年経てば、被害はなかった」かのようにして、全国の原発を再稼働し、原発推進を進めて行こうとしている政府方針ともつながっています。

今後も引き続き、福島県内外の多くの原発事故被害者をはじめ、全国各地で、被害者支援に取り組む人々、反原発・反核運動、原爆被爆者・被爆二世運動、人権擁護運動、環境保護運動、等とも連帯し、その大きな力を背景に政府交渉にも取り組み続け、原発事故被害者支援切り捨て反対、国の責任で全ての原発事故被害者へ健康手帳交付など「**被爆者援護法**」に準じた新たな法整備を実現させましょう。そのために「**福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会**」呼びかけの署名を拡大し、被害者の訴えを広め、運動の力として行きましょう。

ヒロシマ、ナガサキの原爆の日に ベラルーシからの 挨拶を送ります



〈2024年8月6日〉

日本の友人の皆さん！

ヒロシマ原爆の日に際して、ベラルーシから連帯の挨拶を送ります。

1945年8月6日、この痛ましい、そして悲しい日に、一つの原爆が、平和を願う人々の頭上に投下されました。

核兵器は、反核運動に参加する何百、何千人の人々にも、放射能による甚大な被害を及ぼします。たとえ小さな一歩ずつの前進であっても、私たちは力を合わせ、この私たちの美しい地球を安全にし、命を守りましょう。自分たちが暮らす国で、できる限りのことをしましょう。

ヒロシマ、ナガサキ、チェルノブイリ、フクシマや、その他の核被害のリストに、新たな名前が加えられることが決してあってはなりません!!!

ヒロシマの原爆被害者の皆さん、チェルノブイリの被害者は、いつもあなたの側にいます。

どうかお元気で、心からの健康を願っています。



友人のガーリャさんと (9月)

日本の皆さんに、深い愛を込めて。
ベラルーシのミンスク、マリノフカ地区
ジャンナ・フィロメンコ

〈2024年8月9日〉

ナガサキの友人の皆さん！

ベラルーシから挨拶の言葉を送ります。

8月9日は、原爆投下によって、またその後も長年にわたり、亡くなられた多くの市民の方々を思い出し、哀悼する日です。

亡くなられた方々、被爆者への記憶と悲しみは、世界中の多くの人々、他者の不幸と悲しみに無関心ではいられない人々の心に永遠に刻まれて消えることはありません。

ヒロシマとナガサキの街の惨事を二度と起こしてはなりません！

私はベラルーシに暮らしています。私と家族はチェルノブイリの大惨事に苦しみました。

ですから、長崎で被爆された世代の方々が、ご自身の健康、そして愛する人々の健康を心配されるお気持ちがよくわかります。

私はこの地球上の人々の健康が守られることを心から願っています!!!

そして私は、可能な限り、反核運動に参加します。

私にとっては、1945年に被爆され、そしてその後もずっと放射能被害と闘ってこられた山科さんの人生がお手本です。ベラルーシでは、山科さんのことはよく知られています。山科さんは長生きされ、人生をかけて反核運動に奮闘されました。核兵器もなく、「平和」でも軍事でもなく、いずれの核による被害もなく、人々が安全に暮らせるように求める活動に全人生を費やされました。このように、人々の安全な生活を求めて活動を続けられた、山科さんの背中には、私に力と希望を与えてくれています！

そして、私の孫は人々を助けるために医師になりました。

若い世代が、私たちに代わって、しっかりと力をつけてくれています。

親愛なる友人の皆さん、皆さんのご健康と、力と忍耐、そしてご成功を願っています。

ベラルーシより

チェルノブイリ事故被害者、ジャンナ・フィロメンコ
ミンスク、マリノフカ地区

ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ、そして大阪の友人の皆さんに、心からの挨拶を送ります!!!

戦争も核もない世界への思いを引き継ぐ・・・

「山科和子さんを偲ぶ会」が開かれました



今年、6月23日に
長居ユースホテルで

「山科和子さんを偲ぶ会」が行われました。3月13日、突然に永眠された山科さんの遺志を引き継ごうと、「反核フェスティバル」のメンバーが中心となり、「山科さんが築いてこられた反核・平和



運動などを継承、発展させる一助となる「偲ぶ会」を実行委員会として取り組まれたものです。

当日は多方面から約 70 名の方が参加され、山科さんらしい交流の幅の広さが伺えました。開会の辞、実行委員長の出会いと決意の挨拶から始まり、スライドショーで在りし日の山科さんを偲びました。引き続き、それぞれの方々から、山科さんとの交流や思い出など心を込めたスピーチが続きました。また被爆 65 年に山科さんにインタビューした DVD「ナガサキの証言」(広島平和記念資料館作成)も放映され、改めて壮絶な被爆体験と、それゆえに戦争も核もない世界への強い思いが沁みました。被爆直後の体験をつづった手記にもとにした創作ダンス。参加者の中にも入り込み、「若い山科さん」の心身の苦しみを全身で表現したパフォーマンスでした。



原爆でご両親を焼かれ、弟妹を失い、自身も放射線傷害に苦しみ、そして差別やいろんな生活苦難を乗り越えて、被爆者運動、反核・平和運動に尽力され、外国で、学校で、地域で、語り部として最後まで活動を続けられた山科さん。「戦争をしないで」「ヒバクシャをこれ以上生み出さないで」との思いで「平和の種を一つ一つちぎって蒔」いてこられた山科さん。山科さんに学びながら、共に活動してきた私たちは、一人ひとりが山科さんと過ごした

時間を振り返り、語り、偲びました。

戦争が続く今の時代、山科さんが生涯をかけて願った戦争も核もない世界への強い遺志を噛みしめ引き継がなければとの思いを新たにしました。

(下記は、「追悼集」に寄稿した、「救援関西」の代表でもあった山科さんへの私たちからの追悼文です。)

これからも「山科さんと共に」歩み続ける

山科さんは、長崎被爆者として長年にわたり「こころ・からだ・くらし」の苦しみを抱えながら、このような苦しみを繰り返してはならないと訴え、私たちに教えてくださいました。山科さんは、1987 年の第一回核被害者世界大会に参加されるなど、早くから世界の核被害者＝ヒバクシャとも交流してこられ、核の軍事利用の核兵器だけでなく、「平和利用」の原発・核燃料サイクルもヒバクシャを生み出すこと、ヒバクに苦しむ人々をこれ以上生み出してはならない、核被害を二度と繰り返してはならないと「核絶対否定」というヒバクシャとしての強い思いを、私たちに語って教えてくださいました。このような山科さんの活動が基礎にあったからこそ、私たち「救援関西」は、チェルノブイリのヒバクシャに思いを寄せ、顔の見える直接の交流を大切にし、「こころ・からだ・くらし」の被害全体を見据えた



支援に取り組みました。そして「繰り返してはならない」という思いを広く伝えようという基本姿勢を多くの方々と共有し、1991 年の発足から今日まで、歩み続けてくることができたのだと思います。

「救援関西」がベラルーシから、チェルノブイリ・ヒバクシャを招聘し、関西各地、被爆地広島、JCO 事故後の東海村、等々を訪問して交流した際には、山科さんは毎回、空港でのお出迎えから、最後にお見送りする日まで、一週間ほどずっとほぼ毎日、同行していただきました。そして、ご自分と同じヒバクシャとして、「心通じる思い」があったからでしょうか、ベラルーシから来日した方々の側について、細やかな気遣いをしてくださいました。日本の被爆者のこと、反核平和運動のこと、学校で「語り部」として向き合ってきた子どもたちのことについて、来日したチェルノブイリ・ヒ

バクシャの方々に、熱心に伝えてくださいました。また、ベラルーシの友人たちを、ご自宅に招かれて茶湯のお点前を披露して下さったり、送別の集いには和服をビシッと着て参加されたりと、和の文化での「おもてなし」もしてくださいました。このように、山科さんがチェルノブイリのヒバクシャに寄り添って接して下さったからこそ、「ヒロシマ・ナガサキ、そしてチェルノブイリを繰り返させない」「軍事の核も、『平和』の核も反対」ということが、日本の私たちとチェルノブイリの友人たちの「共通の合言葉」になってきたのだと思います。

山科さんは、チェルノブイリ事故から10年目の1996年に、オーストリアのウィーンで、IAEAの国際会議に対抗して開催された「チェルノブイリのセッションについての永久人民法廷：環境・健康・人権の結果」に参加され、そこでもご自身の被爆体験を語られました。山科さんのスピーチの後、感銘を受けた会場の参加者全員が立ち上がって(スタンディング・オベーション)、連帯の拍手が送られました。そして引き続き、山科さんは、ベラルーシに飛んで、チェルノブイリ汚染地のクラスノポリエへ「救援関西」代表団として訪れ、救援物資を届けてくださいました。その際、クラスノポリエの小学校でも、日本の学校でされるのと同じように、ご自分で描いた被爆直後の長崎の絵を指し示しながら、ご自身の「被爆体験」を語ってくださいました。子どもたちは、身を乗り出して話に聞き入っていました。山科さんは、この時のことを思い出して、「おばあちゃんも、こうやって頑張って生きてきたのよと、伝えなかったの。チェルノブイリ事故で被災したあの子どもたちが、どうか健康で育ってほしい。」と、よく話しておられました。

ベラルーシのチェルノブイリ・ヒバクシャの友人たちからも、「山科さんが長年にわたり、体験を語り続けておられる姿は、私たちにとっても励みです。山科さんは、私たちのお手本のような方です。」と、山科さんのことを慕い、尊敬し、いつも「山科さんによろしくお伝えください」とメッセージを託されました。山科さんが3月13日に亡くなられたことをお伝えすると、「移住者の会」のジャンナさんからは、「人は永遠に生きながらえることはできないのだとわかってはいても、私は山科さんが亡くなったことを受け入れることができずにいます。ご高齢になっても山科さんが、この地球上の平和のために精力的に市民活動を続けておられることを、私は、チェルノブイリ被害者の仲間にも話してきました。山科さんのこのようなお姿は、同じくヒバク被害に遭った私たちにとって、そして私たちの子どもや孫にとっても、本当に希望でした。健康で生きていく希望でもあったのです。」「2001年に初めて日本を訪問した時に、山科さんが空港で出迎えて下さったこと、またご自宅に招いて下さったことなど、山科さんとの思い出が一つひとつ蘇ってきます。」「私は4月26日の『チェルノブイリの日』には、近くの学校に招待され、自分の体験を話します。その学校には、山科さんが贈って下さった千羽鶴が展示してあります。私は今一度、山科さんのことを子どもたちにも話そうと思います。」とメッセージを送ってくれました。

山科さんはいつも私たち「救援関西」の集いで代表としての挨拶をして下さる時には、「長崎被爆の山科でございませう」と言って語り始められます。ヒバクシャとして生き抜いてこられた山科さんは、「救援関西」の活動の中に、チェルノブイリ・ヒバクシャの心の中に、そして私たち一人ひとりの中に、ずっとずっと「生き続けて」おられるのだと思います。山科さん、本当にありがとうございました。そして、これからも、どこかで私たちを見守り、叱咤激励し続けてください。

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」メンバー、一同より

カンパ・会費の納入ありがとうございました

(2024.6.3~2024.9.29)

坂岡隆司 衛藤英二 井上保子 玉城豊 中村愛恵 川邊比呂子 振津かつみ 木村英子 榊田幸子
富田洋香 長沢由美 川原重信 中沢浩二 藤岡正雄 原発の危険性を考える宝塚の会 染木富美代
(順不動・敬称略)

2024 年 ゴーワーク夏の家

今年も8月10日～16日の1週間、なんとかやりきることができました。

8組 親6人 こども14人 全部で20人が参加してくれ、新規の参加者さんも1組いて、一歳の子が来てくれました。毎年参加してくれている子たちは成長して、中高生が多くなってきた中、久しぶりの乳幼児の参加でみんなの注目を集めていました、いや赤ちゃん直接会おうと想像の10倍は可愛くてビックリしますね。イベントも盛りだくさんで、海水浴・BBQ・流しそうめん・マッサージ・お茶会・地域の夏祭り、さらにはたこ焼き作り・生八ツ橋作り・バンブークーヘンと、食事イベントも増え、夏のイベント全部盛り+@と言うスケジュールで、それぞれ皆んな楽しんでいました。

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西からは振津さんが来てくださって、子どもたちの健康をチェックし、参加者さんのお母さんたちとお話してくれました。参加してくれているこどもたちは、震災当時まだ小さくて、どんな感じだったかあまり覚えていないと言うこどもも多く、キャンプ中のイベントにこどもたちに向けたお話し会とかも必要かもしれないという意見も出ました。その時はぜひお願いしたいなと思いました。

今回かなり久しぶりに、地域のお祭りへ参加させてもらいました、どうなるか不安もありましたが、地域の方も楽しんでいってねと迎えてくれる感じだったし、夏祭り用に皆んなお小遣いを制限して渡して、その金額で祭りの出し物をどうやりくりするか？と言うのも、皆んな頭を捻って楽しんでいました。

最後のビンゴ大会も当たるかどうか一喜一憂して楽しめて、参加させてもらって本当に良かったです。



ただ今年のイベントスケジュールは正直1週間(実際動けるのは中5日)にしては多すぎて、どれもメチャクチャ楽しいんだけど、ちょっと減らさないと大変すぎかも、という悩ましい感じにもなりました、次回開催の時はイベントの話合いが白熱しそうです。

運営としては今年もいろいろ大変だったなと言う感じでした。

やっぱりキャンプを開催し続けるのは大変で、あれこれ話し合うより流れでやって

しまう方が簡単、と言う状況が続いていろいろな確認事項とか、意識の共有、特に保養キャンプの意義や方向性等が話し合われずにキャブを進めてしまっていました。

そのせいで今年はいろいろな感覚のズレが起こって、それが問題として現れたり、話し合うの大変だなーと思ってるのに、結局開催期間中にしっかり話し合わないといけない状況になってしまったりして、定期的な話し合いの重要性や、続けていくことの大変さを感じました。

大変だった分学ぶことも多かったので、次回以降にどう反映出来るか考えていきたいと思います。

今年も多くの方から金銭的にも物資的にもカンパいただきました、おかげで楽しいことや美味しいものが凝縮された1週間になりました、本当にありがとうございました。

まだまだゴーワークの活動は続いていきますので、今後ともよろしく願います。

ゴーワークキャンプ 田中いお

ゴーワークキャンプ: 東日本大震災に伴う、福島第一原子力発電所事故による放射能汚染によって、汚染された地域に住むこどもたちを一時的にでも放射能から遠ざけたい、保養をしてもらいたいという思いから、こどもたちと親御さんを京都に招き、キャンプを開催しつづけています。

